

駿建

2020 Jul. vol.48 No.2

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of
Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College

SPECIAL FEATURE

だから 建築は 面白い

[研究室紹介編パート2]

SPECIAL FEATURE

だから 建築は 面白い

[研究室紹介編パート2]



ARCHITECTURE IS FUN

表紙（P1）と扉（P2-3）は、「unsplash」という写真素材サイトで「TOKYO」「ARCHITECTURE」というワードで検索した画像たちだ。そこに現れる写真たちからも、「建築」の多様さと奥深さを垣間見ることができる。



コロナウイルスが、どんなに世界に影響を及ぼしても、社会がどのように変わろうとも、「建築」は変わらず、人間のためにあり続けるものです。それはこれまでも、これからも変わらないことのひとつです。だからこそ、コロナウイルスでさえ、関わりのない分野は存在しない。それが「建築」です。それほどに、社会の状況と呼応し、新しいことが考えられ、常にチャレンジされている「建築」は、お世辞抜きで本当に面白い分野です。前回からはじまった本特集は、今回が後半です。今回も、各研究室の先生や研究室に所属する、関係する人たちに登場いただき、建築の面白さについて聞いてみました。建築って、どんなところが面白いのですか？



羽入・星・鈴木 研究室の

鈴木 諒一 先生(短大助手)が考える“建築の面白さ”

音響は、デザインで、 設計者の意図で、大きく変わる

私は音楽が大好きです。高校時代には吹奏楽部に所属していましたが、「このホールは打楽器が良く響くな〜」とか「練習室とホールでは演奏する感覚が違うな〜」など、空間による音の違いを何となく肌で感じていたように思います。そんな経験もあり、「建築」と「自分の好きなこと」を結び付けることができるんだということに共感・感動した結果、現在の研究室への所属を決めました。

私の専門は環境工学で、特に建築空間の音響デザイン手法について研究しています。音響のデザインというものは、目に見ることができない「音」を対象とします。かつ人間の感覚（聴感印象）と強いつながりを持っています。そのため、意匠設計と同じように設計者の意図が空間に色濃く反映される、デザイン性が非常に高いものです。だからこそ、最高の音響空間に出会えたときの感動は何にも代えがたいものであると私は考えています。私自身、学生時代に行った「ウィーン楽友協会」の音が耳にこびりついて離れず、それを超えるような響きの空間を設計したいというのが、建築音響について研究している現在のモチベーションのひとつです。

このような「感動」や「興味」は何事にも大きな原動力になります。皆さんにも趣味にしていることや好きなことがあると思います。そこには、必ず建築空間との関わりが何かしらあるはずです。それほど建築には多岐にわたる専門分野があります。さらに、建築設計には正解がありません。だからこそ永遠に探究し続けていけるテーマであり、私はそこに建築の魅力を感じています。そんな懐の広さや奥深さが建築の面白さではないでしょうか？



高校時代はティンパニを叩き続けた3年間だった。



写真上：音響デザイン事務所に在職中に携わった、住宅内に建設した音楽練習スタジオ。

写真下：世界で最も美しい響きを持つホールのひとつに挙げられる「ウィーン楽友協会」の大ホール。



建築という学問は、
多様な専門分野の英知の結晶



測定器設置の様子



風速測定の様子



建築環境・設備 研究室の

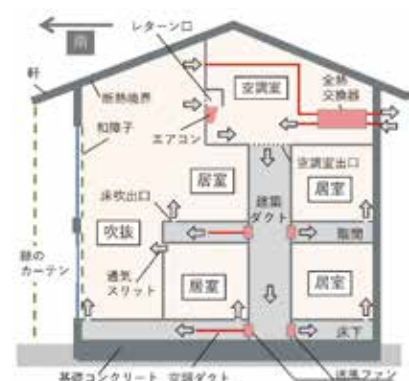
本間俊希 さん(M2)が考える“建築の面白さ”

エアコン1台で、 住宅全体の空調ができる世界

私は住宅の設計に興味があったため、建築学科に入学しました。入学前までは、建築と言えば設計課題で図面を描いて模型をつくるというイメージが強く、将来は建物をデザインする仕事を目指すだろうな、という漠然とした考えがあったことを覚えています。実際にそのような設計の授業もあります。しかし、建築は意匠だけで成り立つものではなく、構造や材料、環境、設備、歴史、法規などさまざまな分野が組み合わせることではじめてひとつの建築が成立するということを、授業を通じて学びました。

オープンラボをきっかけに、住宅における快適性、特に温熱環境について興味を持ち、現在はそのテーマについて深く学ぶことができる建築設備の研究室に所属しています。一般的な住宅では、ひとつの部屋に対して1台のエアコンで空調を行います。この研究室の研究テーマとしている住宅では、エアコン1台で住宅全体を空調しています。私はそんな住宅が存在していること自体に驚きました。研究に取り組む中で、学会での論文発表やセミナーなどに参加させていただく機会がありますが、そこには建築の中でもさまざまな分野のプロの方がいらっします。その方々から意見や評価をいただくことで、自身の成長につながったことを実感しました。そして、研究を通じて、「快適性と省エネ性の両立を目指した住宅の温熱環境」というテーマひとつであっても、その奥の深さを実感しました。このように、多くの分野から成り立っている幅広さ、その一つ一つにある奥深さに建築の面白さを感じました。

駿



研究テーマの住宅概要図

快適性と省エネを
両立できる環境の奥深さ



地盤基礎

研究室卒業生の

田口智也

さん(戸田建設)が考える“建築の面白さ”

たぐち・ともや：2008年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。2008年戸田建設入社。

見えない地中で 建築を大きく支える

私 が大学に入学した頃は、設計（いわゆる意匠設計）をするつもりでしたが、すぐに不向きだと気づき、構造分野に軌道修正しました。構造設計に進んでも役に立つと思い、安達俊夫教授の研究室に入り、研究を行っていたところ、縁があって、卒業後も建設会社で地盤・基礎構造の研究開発を行っています。

大学での研究は室内での要素試験や模型実験が中心でしたが、民間企業での研究開発は原位置での実大実験を行うこともあります。試験体は実際の施工重機を用いて実施工と同様の手順で作製します。柱や梁の構造実験とは異なり、屋外で実験を行うため、試験体だけでなく、載荷のための反力装置（主に杭やアンカー）も施工しなければなりません。雪降る真夜中の実験もありました。

地盤・基礎分野は、建築物が竣工した後ではまったく見ることはできません。しかし、基礎構造の設計・施工が適切に行われないと大きなトラブルにつながることは、近年の事例でご存知と思います。基礎構造の設計は、構造設計者で対応できないことが多く、超高層建築物の基礎設計を行うこともあります。また、地下室を有する建築物では、掘削のための山留め壁、鉄道などのインフラ構造物が近接している場合は、工事を開始するための協議と地盤基礎の知見なくして建築物は完成しません。

地盤・基礎は建築物の印象や使用感に影響しないためか、建築分野では異質に見られることが多いです。しかし、基礎がしっかりしていないと建築物は傾き、山留めができないとそもそも建築物は建ちません。だから建築は面白い。 **談**



建設のはじまりは
地盤基礎の知見から



上：杭の鉛直載荷試験。反力装置を施工し、実施する。

杭頭部にジャッキを取り付け載荷する。

左：杭を掘り出し、出来形を確認する。



だから建築は面白い【研究室紹介編パート1】

ARCHITECTURE IS FUN

Special Feature

建方前木材。



空間構造デザイン 研究室卒業生の

森永信行 さん(mono)が考える“建築の面白さ”

実寸大の空間を体感し、 その場で思考を巡らせる

「安心するからですかね。実寸じゃなくてもいいんですけどね」
ある出張にて、木工事を担当する大工さんへ、「なぜ1/1（実寸図）を描くのか？」と尋ねた際、こう返され、建てることへの意識の違いを痛感し、帰路の道中、実寸についてさまざまなことを考えさせられた。例えば、学生時代の習志野ドームやサマーセミナーといったワークショップを思い出す。発案したアイデアについて、設計から施工、解体まで携わるが、部材の重さに骨を折り、時間やコストに頭を悩ませたことが懐かしい。工程が進むにつれ、図面の密度が上がっていくことにも充実感を覚えた。ささやかな規模ではあるが、実寸大に触れることへの入門編として貴重な経験であった。

実務を積むようになってからは、“実寸大の空間を体感し、その場で思考を巡らせることが、自分の引き出しを増やすものだ”という持論から、携わった案件や雑誌などで興味を惹かれた建築には可能な限り足を運んでいる。また、そうすることで、設計時の想像や紙面からの印象を越える、新たな発見をすることも少なくない。これは建築の大きな魅力であり、実際に建築を訪れる醍醐味である。

2020年、世界中で感染症が跋扈し、人同士の物理的な距離が問われており、生活スタイルを見直す人も多い。自身も、出張は減り、ウェブ打合せも増えた。仕事の仕方も少しずつ変えながら模索を続けている。

この状況下で施工中なのが、冒頭の大工さんにお世話になっているプロジェクトである。原木の形状をそのまま構造体とし、規格化された部材はほとんどない。2年前、設計始動当初の仕事は、伐採した原木を採寸することだった。それをCAD化、モデル化しないと何もはじまらなかった。とにかく実物に触れて、寸法を追いかけた。アナログな手法ではあるが、最先端技術に頼るよりも現実的な方法だったと思う。

■



上棟後。伐採した木を上下逆さまにして起こし、傘をかける。



頂部束は手加工によるもの。基礎から立上る柱は生えたままの形状。

もりなが・のぶゆき：1982年東京都生まれ。2007年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。2007～15年なわけんジム勤務。2015年mono代表。

最先端技術より
頼れる人間の手

SHUNKEN 2020

Jul.

Vol.48 no.2

007



古澤ゼミの学生たちとのディスカッションもここでいった。



建築設計(古澤ゼミ) 研究室の

古澤大輔 先生(理工准教授)が考える“建築の面白さ”

リアルとアンリアルを 横断する経験の楽しさ

建 築って本当に面白いものなんだっ！と実感したのは、確か学部3年生頃だったと記憶しています。3年生くらいになると建築理論の難解な書物などに触れるようになるのですが、当時の僕は、このような書物を通じて、建築の抽象的な側面に興味を持ちはじめました。と同時に、建設現場でのアルバイトを経験し、建築物が具体的に作られていく迫力に圧倒されました。建築ってリアルとアンリアルの両極が同居していてとても魅力的だな、と感じたのを覚えています。教員になってからは、この面白さを学生たちと共有したいと思いながら、研究・教育に携わっています。

そんな思いから、最近、研究室のゼミ生たちと一緒に2つのプロジェクトに取り組みました。老朽化したアパートのリノベーションの仕事です。案を決める段階では、ひたすら抽象的な議論を重ねました。空間の中心性とは何なのか？ エレメントの時間的表現は可能か？ 柱梁の視覚的意味とは？ 空間の空隙とは？ などなど……。そうした議論を経て、学生たちが考えた提案はとても面白いものでした。ひとつは、空間の中心に意味の不在な空虚な柱が屹立している案。もうひとつは空間全体を水平方向に切断し、視線の高さに空隙を設ける案です。アパートのオーナーに学生たちが模型や図面でプレゼンテーションし、ふたつとも採用されました。

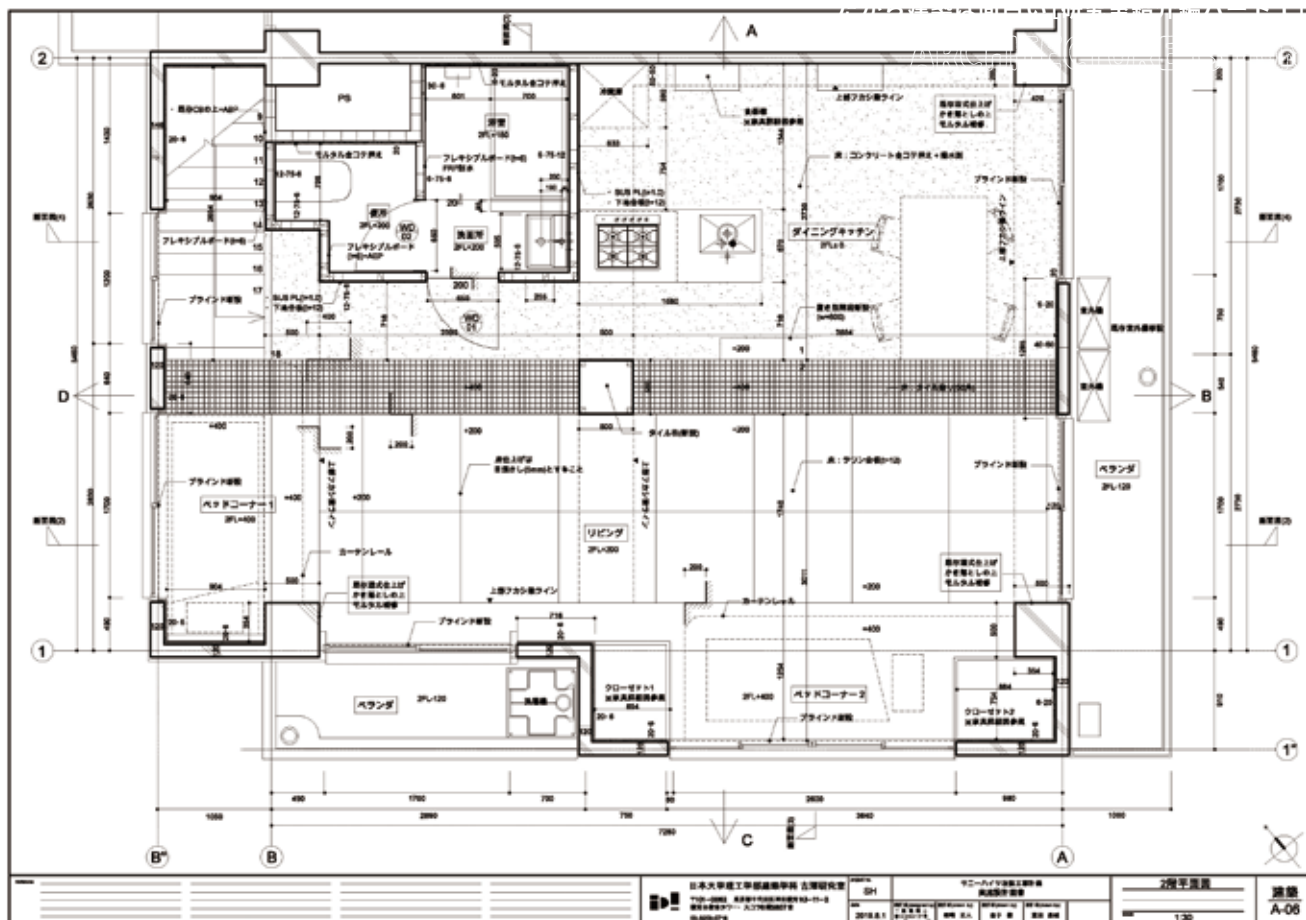
その後、具体的につくるための詳細な実施設計図書を学生たちが描き上げました。そして、工務店に見積もりを取って何度も金額調整を行ってから着工しました。学生と現場に何度も通いながら進捗を確認し、先日、無事竣工しました。完成された空間の中で、ゼミ生たちと感想を述べあったのですが、そこで見た彼らの表情は、これまでで一番輝いていたと思います。建築のリアルとアンリアルな側面を横断した彼らの経験は、僕が学生時代に感じた、あの感覚に近かったのかもしれない。この面白さ、ぜひ皆さんとも共有したいと思っています。いずれにせよ、建築は面白いのです。皆さん、楽しみにしてください。



水平方向に視線が抜ける案の竣工写真。



柱を中心に回遊性を生み出す案の担当学生たち。



学生たちが描き上げた実施設計の図面。



柱を中心に回遊性を生み出す案の竣工写真。



地域デザイン(山中ゼミ) 研究室の

山中新太郎 先生(理工教授)が考える“建築の面白さ”

集落調査～建築の設計～ 地域のデザイン

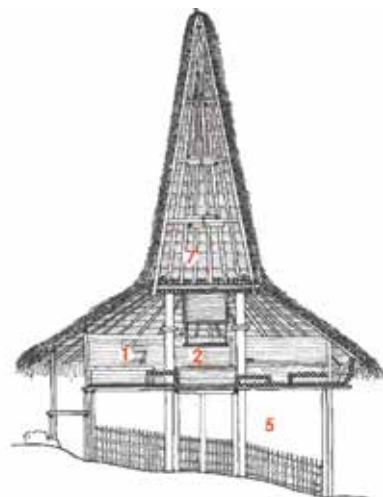
最初に海外の集落調査に行ったのは、インドネシアでした。バリ島、スンバ島、サブ島、イリアン・ジャヤ、チモール島、カリマンタン島など、伝統的な集落を2ヶ月にわたって調査しました。赤道直下の照りつける太陽のもとで、夢中になって住宅の図面や集落の配置図を描いていました。ちょうどM2になる24歳の春でした。その頃、私は日大理工建築で黒沢隆先生のゼミで学んだ後に東京大学大学院に進学して原広司先生の研究室に通っていました。インドネシアの高床式の伝統的な家屋の複雑な内部空間や集落配置に魅了されて、建築空間の断面系列に関する研究を行いました。

設計の実務をはじめたのは、大学院生のときです。北海道の美瑛という風景の美しい町にシリンドーハウスという私にとって最初の建築作品ができたのが27歳のときです。研究をして、設計をして、雑誌に原稿を書いと、20代の後半はあっという間に過ぎていきました。

博士論文を書き終えて、自分の設計事務所を構え、本格的に住宅や集合住宅、店舗などの設計をはじめたのが30歳。できたばかりの設計事務所に、ある日まちづくりの相談が舞い込んできました。今でも研究室のプロジェクトとして継続している下田市の地域再生の相談です。古い家並みを使い、まち全体を連鎖的にリノベーションさせる「下田リノベーション計画」という計画を思いつき、市の依頼を受けて計画書をつくり上げました。これが私にとって地域デザインのはじまりでした。下田の街並みを悉皆調査したり、古い製氷工場の保存活用を考えたり、古い民家をリノベーションしたり、地元の住民の皆さんや行政の方などと地域の再生について議論をしたり。下田ではひとつの地域との関わりの中で、調査や研究、設計や地域計画が同時に展開していく経験をしました。大学で研究室を持つようになって、川崎市や石巻市・雄勝地区、焼津市・花沢地区などへも活動の場が広がっています。

私は、建築を設計することも、地域の研究や計画を行うことも、クリエイティブな行為だと思っています。研究室では、設計も論文も同じように指導します。建築や地域をつぶさに観察して、自分のアイデアを練り上げ、カタチにしていく。その結果、人やまちが少しずつ変わる。そんな醍醐味を感じることができたときに、設計や地域デザインの面白さを実感します。だから建築は面白い。

地域の研究や計画を行うことも
クリエイティブな行為



インドネシア・スンバ島の伝統的住居の断面図。

下田市旧澤村邸改修（設計：山中新太郎・落合正行・山中新太郎建築設計事務所）。

密から疎へ 使いやすさと高性能の両立

新しい日常をつくっていかなければなりません。原稿を書いている現在は非常事態宣言のさなかにあり、大学ではメディア授業を開始したところです。しかし、あと数ヶ月すればかつての日常が戻るのでしょうか。そうは思えない人が多いかもしれません。

なお、コロナが発生する以前から、平均気温の上昇により南極などの氷がとけ、過去の病原体や温室効果ガスが出てくることは言われていたため、新しい日常をつくる衝動が、今来ただけなのかもしれません。これまでは、アニメ「攻殻機動隊」で表現されているような高密度に都市化する未来が信じられてきました。建築業界で言えば、縮退する社会と都市化をかけた合わせた**コンパクトシティ**という、高密度を目的としたコンセプトがあるものの、修正が必要になるでしょう。つまりは、密ではなく疎であること、通気性、開放性が重要な設計の要素になるのではないのでしょうか。

例えば、飲食店であれば新鮮空気のリターン率、オフィスであれば密度を下げたレイアウト、商業施設でも窓を開けられることなどが挙げられます。我々の研究室では、「別冊駿建」にあるように、建築をつくることで負荷がさらに下がるような社会を目指しています。負荷とは、エネルギーやCO₂にとどまりません。3.11以降、より丈夫で高性能な建築物が求められる社会となりましたが、利用者にとって理解しにくい、使いにくい高性能ではなく、使いやすいという意味での負荷も含んでいます。アフターコロナにおいて、より高性能の建築が求められることとなりますが、性能の組み合わせにとどまらない建築を一緒につくっていきたいと思っています。その事例として、昨年取り組んだ研究室プロジェクトのひとつ、梅屋敷商店街において展開したパートナーハウスの家具を写真で紹介します。

■



グラスホッパーで設計プロセスを共有、全体像を確認し、NC切削機でリアルサイズを切り出しているところ。



設計した仕組みと今後の展開可能性をプレゼンテーションし、意見交換を行った。

通気性や開放性が 設計の重要な要素に



切り出した部材は、釘や糊を使わず、軽量であることから、子どもが自由に組み立てている。



地域デザイン(山崎ゼミ) 研究室の

山崎誠子 先生(短大准教授)が考える“建築の面白さ”

永く関われるランドスケープ だからこそ得られる喜び

私は建築学科で建築を勉強はしましたが、大学卒業後、植物の勉強がしたくて造園環境デザインの大学に進みました。今言えるのは、建築デザインだけで世の中ができて上がっているわけではない！ということ。あの建築物を見たいと思って出かけて行けば、目に最初に入るのは建築物じゃなくて、その建築物がある界隈の景色、そしてその建築物の周囲にある環境、地形、緑地です。これをしっかり読み込んで建築物を設計しないと、いくら建築デザインが良くても伝わらないし、その努力は台無しになります。

写真は、一昨年訪れた**フランクロイド・ライト**が設計した、「**落水荘**」です。学生のときからずっと見たかった建築物のひとつです。岩と水と植物が無いと、この建築の魅力はこのように発揮できたでしょうか。この建築物に近づいていくエントランスも雰囲気があって、目の前に建築物が見えてきた感動はあのエントランスがあつてのものだと思います。

2番目の写真は、駿河台キャンパス近くにある「**ワテラス**」の広場です。ワテラスはふたつの高層建築物の周囲をぐるりと広場や緑地、水が取り囲み、周辺で働く人や住民の居心地の良い空間を提供しています。春の花が咲きはじめ、天気の良いときは、お昼ご飯をこの広場に面したベンチで食べる方が多く見られます（コロナ禍で今はその光景も変化しましたが……）。私はこのワテラスのコンセプト立案から緑地の設計監修、現在はエリアマネジメント評議委員まで、約20年間関わっています。建築デザインだけの関わりだと、この20年というタイムスパンはなかったでしょうね。地域デザイン、ランドスケープデザインに関わったからこそ生まれた関係だと思います。「ワテラスのあの周囲の環境、なんとなくいいね」と言われると大変うれしいです。だから建築じゃなく、地域デザイン・ランドスケープは面白い。 駿



落水荘外観。



ワテラスの広場。

環境、地形、緑地を読み込んで
建築を設計する大切さ



建築史・建築論 研究室の

田所辰之助 先生(理工教授)が考える“建築の面白さ”

だから建築は面白い【研究室紹介編パート1】

ARCHITECTURE IS FUN

分野を超えて対話し、 多様な切り口で歴史を見る

ときにシンポジウムや講演会、また展覧会の企画などに関わります。大学の垣根を越えて、また美術史や社会学、言語学など建築外の専門の研究者たちと、共通のテーマのもと対話に取り組みます。研究とは、何か「正解」があるようなものでもありません。特に建築史の分野では、歴史上の事実は不変でも、社会や後世に与えた影響を考えたとき、その意味合いはさまざまに変化します。どのような切り口から建築を見つめ直すか、その切り口の多様さが、建築史の世界を豊かにしていきます。シンポジウムや展覧会は、そうした建築の多彩な姿を垣間見れる、まさに恰好の場となるものです。

「吉田鉄郎の近代—モダニズムと伝統の架け橋」展は、東京・大阪両中央郵便局の設計で知られ、日大でも教鞭をとった建築家・吉田鉄郎の足跡を振り返る貴重な機会となりました。吉田の評価はすでに揺るぎないものですが、これまで知られてこなかった数々の図面から、吉田の設計活動の幅広さが浮き彫りになりました。

また、分離派100年研究会は2012年に発足し、8回の研究会と8回のシンポジウムを経て、「分離派建築会100年—建築は芸術家」展を本年、東京と京都で開催します。分離派建築会は日本のモダニズム建築のはじまりを画し、その歴史的位置づけはやはり揺らぐことはないでしょう。しかし100年を経ているなお、その活動の意義や、日本の近現代建築への影響は、多様な角度から分析し直されています。

こうした対話の場では、歴史に、そして建築に切り込んでいくための言葉の力が大切になります。学生時代、皆さんもぜひ、建築をいかに語るか、その言葉を磨いていってください。歴史は、ガラスの切子細工のようなものかもしれません。魅力的な言葉で、さまざまな角度から切り込まれ、光を乱反射させて輝きを増していく。だから歴史は、そして、建築は面白い。■



連続シンポジウム「分離派建築会誕生100年を考える」第7回（2019年10月26日、東京都市大学）のポスター。展覧会「分離派建築会100年—建築は芸術家」が本年10月10日よりバナソニック汐留美術館で、2021年1月6日より京都国立近代美術館で開催される。



「吉田鉄郎の近代—モダニズムと伝統の架け橋」展（2019年11月1日～2020年2月11日、文化庁国立近現代建築資料館）の会場風景。オープニングにて、実行委員会の皆さんとともに。

建築をいかに語るか、
その言葉を磨いていこう



都市計画(根上・泉山ゼミ) 研究室の

泉山壘威 先生(理工助教)が考える“建築の面白さ”

プレイスが豊かになれば、 都市が豊かになる

建 築は建築作品をつくることが目的ではなく、人の生活を豊かにするための手段です。都市は人や建築の集合体であるとともに、経済活動や交流などさまざまな都市生活が行われる舞台です。これはつい忘れがちなことです。

都市には、建築以外にも、パブリックスペースなどさまざまなプレイス（場所）があります。ストリートに滞留空間をつくるオープンカフェやパークレットは、地域のコミュニティや魅力・活力の根源でもあります。その中で重要なのは、パブリックライフ、都市生活です。パブリックライフには3つの要素が必要だと思います。①空間＝建築や芝生、樹木などの工事を伴ってつくるもの、②場＝プレイスとも言いますが、可動椅子やパラソル、ピクニックシートなど、人が調節可能な設えとアクティビティを誘発するもの、③人＝生活・利用する人が、居心地良く過ごすためには、多様な種類の活動と目的が必要です。

こういった3つの要素が日常的にある状態がパブリックライフです。パブリックライフが過ごせる都市は、都市の滞在時間もあがり、出会いやコミュニケーションも増え、経済活動や魅力も増えます。そんなパブリックライフも建築的思考と空間アプローチが活きてきます。



ソトノバの未来。



パークレット（米国・サンフランシスコ市）。



パブリックライフが
過ごせる都市をつくる

ブライアントパーク（米国・ニューヨーク市）。

MESSAGE FROM OB/OG VOL.11

「研究」の視点と「実務」の視点をも
ともに感じる事ができた喜び

建 設会社（ゼネコン）の中で都市開発という部門に所属しており、首都圏や地方都市を中心とした大型建設プロジェクトや不動産投資事業の立案・事業推進に関わる業務に携わっています。一般的に建設会社は、建築や土木の施工を主たる業としていますが、都市開発部門は、建設工事の受注機会や不動産投資による収益機会の創出を目的とした事業の仕組みづくりを行っています。

ひとつの建築物が完成するまでには、多くの関係者（事業者、設計者、施工者、権利者など）の意向を調整し、行政から必要な許認可を取得していかなければなりません。そのような中で、私は事業者の立場として関わりながら、プロジェクトの実現を目指して業務に取り組んでいます。

事業者としてまちを変えていく仕事

この職種を意識するようになったのは、大学3年生の就職活動の時期でした。それまでは、建築の仕事と言うと、設計や施工といった「技術者」のイメージしかありませんでした。しかし、建築業界の仕組みを調べていくと、デベロッパーのような「事業者」の立場としてプロジェクトを立案・推進できる職種があることを知りました。大型プロジェクトの実現によって「まちづくり」に貢献することができるのは、ダイナミックかつやりがいを感じられる仕事だと思いました。それをきっかけに大学院へ進学し、都市計画をはじめとして事業に関するさまざまな仕組みの知識を学びながら、都市開発事業に関わる職種を強く志望するようになりました。

中でも組織の中で建築技術者を抱えながら、「事業者」の立場で業務に携われるゼネコンの都市開発部門にとっても魅力を感じました。複雑化が進む都市開発事業において、技術者の力を借りながら一団となってプロジェクトに取り組めるのは、開発マンとしての力を付ける上で理想的な環境だと考えたからです。



難波中二丁目における開発イメージパース（大成建設ホームページプレスリリースより）。大阪市内の難波にて、事業推進中のホテル開発プロジェクト。日本初出店のセンタラ・ホテル&リゾートのハイエンドホテルを誘致予定。本件では、大成建設も出資者として事業者に参加しており「開発・設計・施工」が一体となって取り組んでいるプロジェクト。



飛田裕也（とびた・ゆうや）

大学院修了年：2014年修了

所属研究室：都市計画研究室（宇崎嶺研究室）

卒業研究のテーマ：一体型土地区画整理事業による市街地形成に関する研究

修士研究のテーマ：土地区画整理事業における地区計画による建築物誘導の有効性に関する研究

勤務先：大成建設株式会社 関西支店 開発部（都市開発本部所属）

答えの無い問題に立ち向かう日々

仕事で一番大変さを感じるのは、「どのように課題を解決するか」ということを日々考えさせられることです。都市開発事業を推進するには、日々さまざまな課題にぶつかりますが、「●●に課題があるので進めることができません」では、プロジェクトは実現しません。「物事を前に進めるための解決策」を考え、行動に移していくことが非常に重要になります。学校の勉強は「答え」があることがほとんどですが、仕事では答えの無い問題に対して、自身でプロセスを考え解決策を導き出す必要があります。しかし、毎日のように壁にぶつかりながらも、課題を解決し物事を前に進めることができたときは、大きな達成感を感じることができます。

大学での研究室での研究活動を通じて、「物事を論理的に整理する力」を身に付けることができたこと、また、論文の執筆や発表を経験し、資料作成能力やプレゼンテーション能力を養うことができたことは、日々の業務を行う上での基礎能力として、間接的に役に立っていると感じています。また、学生時代に「土地区画整理事業」を研究テーマとし、就職後も運良くその業務に携われる機会があったことから、研究の視点と実務の視点を肌で感じることもできたことも、非常に良い経験になっています。また、関係各所には日大理工建築出身の多種多様なキャリアを積んできたOB・OGの方々がたくさんいらっしゃいます。日々、仕事をしていく中で、わからないことなどがあっても、周囲に相談にいけない人がいるというのは、非常に助かっています。その中で、さまざまな意見を聞きながら、自身の知見を深めていくことができるのは、今後の社会人生活の参考になると感じています。

■

NEWS & TOPICS

新任非常勤講師紹介

本年は11名の非常勤講師の先生方をお迎えすることになりました



理工 | デザイン基礎Ⅰ、Ⅱ

井川 博英



(いかわ・ひろひで)：1992年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1992年～清水建設設計本部。2019年～同教育文化施設設計部副部長。

誰もが、二度とは戻らない道を今歩いていきます。建築学科を選んだ次の4年後。自分が思い描いた道のりは確信となっているでしょうか。建築のデザイン、設計はとても面白く、やりがいのある道のりです。一流のスポーツ選手は言います“一日一日を大切に生きてください”。努力を重ねるほど自身の未熟さを知ります。それを克服した数だけ実力がつき、道は開けます。学びも、遊びも、二度とは戻らない今を大切に過ごしてください。そのサポートをさせてください。よろしくお願いいたします。



ガーデニール砦 WEST

短大 | 建築デザインスタジオⅠ、Ⅱ

梅原 智洋



(うめはら・ともひろ)：2008年日本大学理工学部建築学科卒業。2010年同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。2010年空間工学研究所。2011年～KAP。

建築の設計は、条件が決まっても思想や解釈によりで上がる空間に唯一の解が生まれないのが面白いところです。それは意匠設計に限らず構造設計も同様で、工学的判断や各々が蓄えた材料、力学の知識を駆使してできる空間は、また違った建築の魅力を引き出します。何かと敬遠されがちな構造について、大学で学ぶ力学や工法の知識を自身の設計に活かす方法、その面白さを、授業を通して伝えられたらと思っています。



とらや 赤坂店

NEWS & TOPICS

理工 | デザイン基礎Ⅰ、Ⅱ

菅原雄一郎



(すがわら・ゆういちろう)：1995年日本大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1995～99年シーラカンズ。1999～2006年シーラカンズ K&H。2001～05年エヴァ・ジリクナアーキテクト（ロンドン）。2006年～石本建築事務所。

デザイン基礎Ⅰ、Ⅱでは「手描きで考える、コンピュータで考える」をテーマに、試行錯誤の楽しさを皆さんと共有できればと思っています。建築をつくるためのデザインプロセスは実にさまざまです。みんなに自分の考えを伝えるために、またプロジェクトを動かすきっかけをつくるために、何かしら「かたち」にしてアウトプットし続けることがとても重要です。課題を通じ、新しいさまざまなツールを用いて考えを「かたち」にすること。皆さんにとっても私にとっても新しい発見がきっとあります。



東邦大学習志野キャンパススポーツアリーナ（Photo=大沢誠一）

大学院 | 建築デザインⅠ

仲俊治



(なか・としはる)：2001年東京大学大学院修了。山本理顕設計工場を経て、2009年仲建築設計スタジオ設立。

日常生活を豊かにしたり、世界を平和にしたり、建築が貢献できる分野は幅広く存在します。建築の設計はとてもやりがいのある仕事です。かといって建築が万能ということでもありません。今まで以上に、これからの世界のあり方について、思想を持つことが大切な時代のように思います。各々の興味・関心を深掘りしたり、異分野と対話したりしてください。大学内外での研鑽を通じて、皆さん一人ひとりに固有の、そんな建築設計の土台が築かれることを期待します。



金沢美術工芸大学（SALHAUS、カワグチテイ建築計画、仲建築設計スタジオとの共同設計）

理工 | 建築施工法

西村崇



(にしむら・たかし)：1991年日本大学生産工学部建築工学科卒業。1991年清水建設入社。現在、同建築総本部生産技術本部建築技術部所属。

6年前前にも同学部で建築施工法の非常勤を6年間務めておりました。建築施工が求める能力として、「コミュニケーション能力」、「やり遂げる知力・胆力」、「チャレンジ精神」、「リーダーシップ」「協調性も欠かさない」人物と良く言われます。これらは、一朝一夕には身に付くものではなく、今までどのように学生時代を過ごしてきたのが重要であり、そのためにも先生方や先輩、友人たちとの限られた時間を大切に過ごし、「意味のある時間」を有効に遅しく活用していただきたいと思います。



YSアリーナ八戸

NEWS & TOPICS

大学院 | 建築構造特論 II

原田 公明



(はらだ・きみあき)：1987年東京都立大学大学院工学研究科修了。1987年日建設計入社、現在同エンジニアリング部門構造設計グループダイレクター。

日建設計に入社以来、構造設計に従事し、今年で34年目になります。さいたまスーパーアリーナ、YKK80ビルなど、大空間建築から免震・制振構造などさまざまな構造形式の設計を行ってきました。構造設計は計算するだけの仕事と思いませんか？ 大きな勘違いです。構造設計は、建物の形やシステムを創造し、デザインできるとても魅力的な仕事です。実例を用いて、なぜその形や構造に、どうやってつくったのかなどを講義し、改めて皆さんと建築や構造の面白さを一緒に考えたいと思います。



立教大学新座キャンパス新教室棟

理工 | インテリアデザイン

平田 真貴



(ひらた・まき)：2001年日本大学理工学部建築学科卒業。2003年同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。日本大学理工学部建築学科副手を経て、Koizumi Studio勤務。

3年後期のインテリアデザインを担当することになりました平田真貴です。私は、国立市の片隅で、生活に関わる道具をデザインする事務所「Koizumi Studio」と、小泉誠のデザインを伝えるお店「こいずみ道具店」で働いています。ちょうど、就職活動や卒業制作に向けて自分のテーマは何かを問い直す時期。みなさんの心に響く授業になると嬉しいです。新型コロナウイルス感染拡大の影響により生活が一変しておりますが、この状況さえも、今後の未来をつくっていく糧にして前に進んでいけるように、一緒に学んでいきましょう。



こいずみ道具店 (Photo = Nacása & Partners Inc.)

理工 | 建築設計 IV

寶 神 尚 史



(ほうじん ひさし)：1997年明治大学理工学部建築学科卒業。1999年同大学院理工学研究科建築学専攻修了。1999～2005年青木淳建築計画事務所を経て、2005年日吉坂事務所設立。

私は大学院を出たあと、アトリエ系の設計事務所で設計力を鍛え、独立しました。学生時代から今まで生きてきて、一つ言えるのは「設計は飽きない」ということです。傍目から見れば「やたらと忙しそう」に見えるかもしれませんが、本人としては「好きなことに没頭しているだけ」だったりします。しかもこの職能がすごいのは、なにせ建物を設計できますので、自分で自分の建物をつくっていくこともできます。これほど面白い仕事はありません。授業ではその楽しさをシェアしていければと思っています。



西荻窪に建てた自社複合ビル (photo=阿野太一)

NEWS & TOPICS

理工 | 建築設計Ⅳ

水野吉樹



(みずの・よしき)：1983年日本大学理工学部建築学科卒業。1985年同大学大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1985年竹中工務店入社。現在、同東京本店次長（設計統括）。

今でも学生の頃の課題や卒業設計作品を思い出すことがあります。それは、そのときに気づいたことが、今も自分の目指すべき建築の原点となっているからです。建築とその周辺の仕事に携わる人にとって、デザインや設計の授業での経験は、社会で自身の想いを具現化する力を養うための大切なステップだと考えます。若い豊かな感性を武器に、興味のあること得意なことにどんどん挑戦し、自分なりの夢や目標を見つけてほしい。皆さんとの対話の中で、そのためのアドバイスができればと思っています。



水天宮御造替

短大 | 建築・生活デザインの基礎、建築デザインスタジオⅠ

宮坂 知明



(みやさか・ちあき)：1986年日本大学理工学部建築学科卒業。1986年棚橋廣夫+エーディーネットワーク。1999年より岡部憲明アーキテクチャーネットワーク。2002年より同上管理建築士。

想像力を表現する、その設計のプロセスは、音楽に例えるなら作曲者であり指揮者でもあるように、創造することの喜びや困難を合わせ持つものです。ものを創ることの醍醐味は、自分はデザインが得意不得意であるなどと決め付けずに、形あるすべてのモノや人や建築との出会いに触発され、内在する想像力の可能性を探索することで、思いもよらない展開に開眼するものであるとも思います。その1本の線、皆さんはそのはじめての線を、いつ、どのように、あるいはどの方向に向かって力強く描きますか？



翼のある家

大学院 | 建築構造計画演習Ⅰ

横瀬 辰男



(よこせ・たつお)：1985年日本大学理工学部建築学科卒業。1985年中野組（現：ナカノフドー建設）入社。現在、同国内建設本部技術研究所長。

建築設計、特に構造設計に携わって35年が経過しました。入社時は建築の知識がなく苦労し、学生時代にもっと関心を持てば良かったと感じたことを思い出します。皆さんが同じ苦労をしないよう演習を進めたいと思っています。現在、建築業界では構造設計を目指す人が少ないと感じています。構造設計は、意匠設計同様、感性やセンスが発揮できる非常に楽しい仕事です。演習を通し、この楽しさを理解してもらい、構造設計を目指す人がひとりでも多くなれば幸いです。よろしくお願いします。



New Factory Block Extension for J.S.T CONECTORS (MALAYSIA)

NEWS & TOPICS

2020年日本建築学会賞（論文）を中田善久教授が受賞

中田善久教授が、「高強度コンクリートの品質に影響を及ぼす調査および施工要因の評価に関する一連の研究」によって「2020年日本建築学会賞（論文）」（主催：日本建築学会）を受賞した。この賞は、近年中に完成し発表された研究論文であって、学術の進歩に寄与する優れた論文に対して授与される。他にも、今村水紀非常勤講師が、中藤泰昭氏、高岩遊氏（大成建設）とともに、建築作品「La・La・Grande GINZA」によって「2020年日本建築学会作品選奨」に選ばれている。

2019年度JIA日本建築大賞を古澤大輔准教授が受賞

古澤大輔准教授が、建築作品「古澤邸」によって「2019年度JIA日本建築大賞」（主催：日本建築家協会）を受賞した。この賞は、特に建築文化の向上に寄与し、芸術・技術の両面において総合的な価値を発揮した建築に対して授与される。

2020年度住宅建築賞を古澤大輔准教授が受賞

古澤大輔准教授が、建築作品「古澤邸」によって「2020年度住宅建築賞」（主催：東京建築士会）を受賞した。この賞は、近年多様化している「すまい」の新しい可能性を示した優れた住宅作品を表彰するもので、応募点数74作品の中から、住宅建築賞金賞1点に次ぐ住宅建築賞3点に選ばれた。

第3回日本建築設計学会賞を古澤大輔准教授が受賞

古澤大輔准教授が、建築作品「古澤邸」によって「第3回日本建築設計学会賞」（主催：日本建築設計学会）を受賞した。この賞は、近年、国内に竣工した建築作品を対象として、「建築という困難かつ魅力的な道を拓き進む者たちの道標となる作品」を表彰するもので、応募点数71作品の中から、大賞1点に次ぐ5点に選ばれた。

BOOK & MAGAZINE

古澤大輔准教授の建築作品「下高井戸の産婦人科」が「新建築」2020年6月号（新建築社）に掲載された。

山崎誠子短大准教授が設計協力した建築作品「生長の家福島県教化部新会館」（設計：八光建設 LAN 間十間計画工房 ナチュラルセンス）が「新建築」2020年4月号（新建築社）に掲載された。

古澤大輔准教授の建築作品「古澤邸」が「TOTO通信」2020年春号（TOTO）に掲載された。なお、特集「分解、そして再構築」では、建築家の門脇耕三氏、米澤隆氏と古澤准教授の座談会も掲載されている。

佐藤慎也教授と山崎誠子短大准教授がコラムを執筆した『ビルディングタイプ学入門 新しい空間と社会のデザインがわかる』（中村陽一・高宮知数・五十嵐太郎・槻橋修、誠文堂新光社）が刊行された。「ビルディングタイプ様々な『学びの現場から』」と題したコラムを執筆している。

山崎誠子短大准教授は、SE構法の冊子「Network SE」2020年4月号、5月号（エヌ・シー・エヌ）のコラム「より良い住まいの道しるべ」に、住宅の植栽設計の手法に関する記事が掲載された。



「La・La・Grande GINZA」



『ビルディングタイプ学 入門：新しい空間と社会のデザインがわかる』（誠文堂新光社）

ARCHITECTURE & ME

[連載] 私と建築 vol.100

東京ドームが 今の私を形づくっている

1982年、大学院の博士後期課程まで進んでいた私は、学部4年生からはじめた、空間構造の座屈現象について研究していました。いつか、研究成果が世の中の構造設計に活用されることを夢見ていました。その後、縁があり、竹中工務店(以下「竹中」)に入社しました。当時、竹中はカッコリした建築を数多く手がけていましたが、若くして就任した社長が先頭に立ち、全社一丸となって何か新しいことにチャレンジしようとする機運に満ちていました。空気膜構造による大規模スタジアムの実現も、その内のひとつでした。膜構造に関する専門家は国内に少なく、私の指導教員であった斎藤公男先生を経由して私に声がかかり、竹中に入社したのです。

東京ドームのプロジェクト・チームに入り、最初の業務は、25m角の大規模な試験体の施工と、この試験体を使った実験でした。大学の研究では、コンピュータを用いた数値解析が主だった私が、実験を通して考えるという、まったく異なる世界に飛び込んだものですから、強烈な刺激でした。それぞれのスペシャリスト達と一緒に何かをつくり上げていく迫力は桁違いでした。そのようなプロジェクト・チームの一員として、28歳の入社ホヤホヤの私が、40代のリーダーたちと、対等に議論ができる恵まれた環境でした。

当時、空気膜構造はアメリカには既にいくつか実現されており、これらを手掛けた有名な技術者にも教えを乞いましたが、あまり技術的な裏づけはしっかりされていませんでした。東京ドームの前に、スパン30mクラスの空気膜構造の建築を建設しましたが、施工の際に膜を持ち上げるときに、くねくね波打ってしまうんです。これは美しくない

おかだ・あきら：1954年徳島県徳島市生まれ。徳島県立城南高等学校卒業。1977年日本大学理工学部建築学科卒業。1979年同大学院理工学研究科博士前期課程建築学専攻修了。1982年同博士後期課程建築学専攻単位取得退学。1982～90年竹中工務店勤務。1990年～日本大学理工学部建築学科。

text=岡田章 教授

いし、安全面にも問題があります。しかし、アメリカの技術者によると、波打つのはあたり前で、もし膜が破れたら修繕すれば良いという考えでした。日本ではそんなわけにはいきません。美しく、破れないように、完成させる責務があります。そこで、追加で大規模な実験を実施しました。このようにアメリカの技術が日本と異なる価値観に根差していることもあり、ほとんど一から技術を検討・開発しながら設計を行いました。

現場では施工管理に携わりました。コンクリートや鉄筋など、膜構造とは異なる分野もたくさん担当しました。現場には、日大出身の先輩がたくさんいました。東京ドームという大型プロジェクトに開発から竣工まで携わると、ゼネコンの技術力の高さはもちろんのこと、さまざまなスペシャリストがどのように目的をひとつにして成功に結び付けるのかについて、実感できました。なかなか得がたい経験でした。

その後、またまた縁があり、大学の研究職に就くことになりました。私の心の奥底には、「教育したい」という情熱があったのです。大学においては、研究・教育・実践の3つのバランスを常に心にためています。モノづくりをするときに、実践を意識して研究し、そのノウハウを教育に活かしたいと思っています。特に、スペシャリストが切磋琢磨する世界を私自身が経験しているからこそ、そこで戦える人材を世の中に送り出していかなければならないと考えています。学生の皆さんに30年後に活躍していただきたく、研究・教育・実践の理念を伝えていきたいと思っています。

駿



Contents

02 [SPECIAL FEATURE]

だから建築は面白い [研究室紹介編パート 2]

- 01：音響は、デザインで、設計者の意図で、大きく変わる | 鈴木諒一 短大助手
- 02：エアコン1台で、住宅全体の空調ができる世界 | 本間俊希 (M2)
- 03：見えない地中で建築を大きく支える | 田口智也 (戸田建設)
- 04：実寸大の空間を体感し、その場で思考を巡らせる | 森永信行 (mono)
- 05：リアルとアンリアルを横断する経験の楽しさ | 古澤大輔 准教授
- 06：集落調査～建築の設計～地域のデザイン | 山中新太郎 教授
- 07：密から疎へ 使いやすさと高性能の両立 | 二瓶士門 助教
- 08：永く関われるランドスケープだからこそ得られる喜び | 山崎誠子 短大准教授
- 09：分野を超えて対話し、多様な切り口で歴史を見る | 田所辰之助 教授
- 10：プレイスが豊かになれば、都市が豊かになる | 泉山聖威 助教

16 [Message from OB/OG]

- vol.11「研究」の視点と「実務」の視点をともに感じる事ができた喜び
| 飛田裕也 (大成建設 /2014 年修了)

17 [NEWS & TOPICS]

- ・新任非常勤講師紹介
- ・2020 年日本建築学会賞(論文)を中田善久教授が受賞
- ・2019 年度 JIA 日本建築大賞を古澤大輔准教授が受賞
ほか

22 [Architecture & Me]

- vol.100 東京ドームが今の私を形づくっている | 岡田章 教授

24 [Visit & Criticism]

- 学生建築探訪 vol.14 古澤研4年生からのオススメ建築本



船橋日大前駅

構造計画、施工計画、施工監理に取り組んだ。スパン20mという比較的小規模な架構でありながら、理工系の学生が利用する近未来型地下鉄駅舎というデザイン・コンセプトを実現するために、新しい構造形式 SKELSION を生み出した。この構造の開発を通じて、卒業研究や修士研究が行われ、多くの国内外の論文が発表された。



フライアウト型ラチスシェル試験体

学部4年生から3年間、没頭した網目状単層格子シェルの弾性安定問題に関する研究。不安定現象を安定的に評価できる数値解析手法の確立が最終目標。夏季休暇中はこの実験に明け暮れた。

東京ドームのインフレーション時

下に凹んだ状態で施工された屋根面は、空気を送り込むと徐々に膨らむ。このとき、屋根面の膜もケーブルも不規則に変形しながら持ち上がることになる。この状態でも、構造体に破損が生じないように変形させるか、世界的にもユニークな研究を行った。

東京ドームの空撮

東京ドームの全景。隣接する小石川後楽園の自然環境を保持するために、全体が傾斜した特徴的な形態を有する。対角方向スパンが約201m。面積の大きさの単位としてよく使われる東京ドームの大きさは4万㎡、どこの面積でしょうか？

SHUNKEN

2020 Jul. Vol.48 No.2

「駿建」

発行日：2012年7月31日

発行人：佐藤慎也

編集委員：橋本修・山中新太郎・田嶋和樹・

古澤大輔・道明裕毅・堀切梨奈子・山崎誠子

編集・アートディレクション：大西正紀+田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

Visit & Criticism

学生建築探訪 vol.14

古澤研4年生からの
オススメ建築

本

今回の建築探訪はお休みです。その代わりに、古澤研究室所属の7名の4年生たちから、オススメの建築本を1冊ずつ紹介します。無数に存在する建築本。どんな本に出会うかで、その後の人生をも左右するものです。ぜひ、興味を持った本は手に取ってみてくださいね。

ビッグデータで建築は都市は変わるのか！？



『シン・ニホン～ AI×データ時代における日本の再生と人材育成～』（安宅和人/News Picksパブリッシング/2020）：「情報産業革命」と呼ばれるビッグデータとAIの時代の中で、私たち若者が声を上げて動くことの重要性を深く感じた。日本には他国の技術を取り入れ、新しいエコシステムを構築する「出口産業」の文化を活かした歴史がある。この文化を活かし、新しい時代を乗りこなすか飲まれるか。データを理解したクリエイティブな若者が、今何を吸収し、どう発信するべきかを考えるきっかけになるかもしれない。（佐藤玲菜）

リノベーションって「いつ」生まれたの？



『時がつくる建築～リノベーションの西洋建築史～』（加藤耕一/東京大学出版会/2017）：最近、雑誌で「リノベーション」という言葉をよく目にする。僕を含め、この言葉が最近生まれたと思う人はたくさんいるのではないだろうか。しかし、西洋では古代から行われる当たり前の建築行為だった。これは西洋の歴史を紐解き、実は日本にもリノベーションの歴史があったことを発見する本である。（稲村浩成）

市民の視点だから見える都市のこと



『アメリカ大都市の死と生』（著：ジェイン・ジェイコブズ/訳：山形浩生/鹿島出版会/2010）：この著者は研究者でも建築家でもない。1961年、ニューヨーク市のダウントウンの一介の住民は、都市の再開発の現状を前に近代都市計画を糾弾する。彼女の主張には特定の専門性はなく、詳細な観察を基に都市を多角的に捉えて問題を炙り出し、都市の本質を導く。彼女の攻撃は、世界で画一的になりつつある現代都市にも、今なお鮮やかだ。（平山葉歩）

建築とは空間？プログラム？それとも ...



『建築と断絶』（ベルナール・チュミ/訳：山形浩生/鹿島出版会/1996）：空間・プログラム・断絶の3部からなる論集。チュミは建築の形態だけでなく、利用形態を捉えることの重要性を論じる。現代において形態と機能は断絶しており、その断絶にこそ可能性があると述べている。正直な感想は、とても難しく力不足を痛感した。しかし、新たな建築を捉える見方が得られる一冊である。何度も読み返そう。（久保開陸）

美術にはどんな力があるのだろうか？



『抽象の力～近代芸術の解析～』（岡崎乾二郎/亜紀書房/2018）：1周目、美術の歴史書。2周目、そのモノがそれである根拠を解析する解体新書。3周目、相反する概念の衝突（批評）から本質とは何か論じる哲学書。岡崎の縦横無尽な論の展開は、共時性を示すことで、芸術を貫く一筋の真理を志向するためである。ということは、一冊の中を何度も反復して気づき、さらに周辺書籍を何冊も参照しなければ、この本はわからない。しかし、何かが書いてあるか知ろうとするその過程こそ、この本の言わんとすることである。（森野和泉）

日本文化論から紡ぎ出す日本的空間とは？



『見立ての手法～日本的空間の読解～』（磯崎新/鹿島出版会/1990）：日本的空間を磯崎新が「ま」、「かつら」、「にわ」、「ゆか」、「や」、「かげろひ」に分けて解説。日本の時空間、美術的価値、宗教思考などのさまざまな要素も見られる。磯崎が手掛けた、展示会やコンペティションの視点もある。日本における、空間の美しさ、価値観を学べる本になっている。（田沼元）

「ひとり空間」の多様な世界から見てくこと



『ひとり空間の都市論』（南後由和/ちくま書房/2018）：本書は、都市の「ひとり空間」の諸相について、住まい、飲食店・宿泊施設、モバイル・メディアという3つの軸から述べている。特にモバイル・メディアについては、近年のSNSへの人間の振る舞いや、新たなビジネスサービスから「ひとり空間」を論じており、我々世代が共感する事柄が多い。新型コロナウイルスの影響によって「ひとり空間」が増殖している現代だからこそ、読んでほしい一冊。（西田美奈）

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。＜shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp＞